

小泉八雲を知る旅

第2回 4歳で天涯孤独の身へ

では、八雲の人生を少しずつ追っていきましょう。

八雲（ラフカディオ・ハーン）は 1850 年、ギリシャのレフカダ島で、アイルランド人の陸軍軍医である父（チャールズ・ハーン）とギリシャ人の母（ローザ・カシマチ）の間に生まれました。その後、父は西インド諸島へ赴任し、八雲は2歳で母と共に父の地元であるアイルランドのダブリンへ。3歳の時に父は帰還しますが、妻への愛は冷め、結婚は悲劇に終わってしまいます。

父はある女性との恋に破れた失意の中で、ギリシャの赴任地で巡りあった母と恋に落ち、ギリシャ正教の彼女の家族が大反対する中、駆け落ち同然に結婚しました。母子で夫の故郷に移るも、ハーン家はプロテスタントの由緒ある家柄であり、彼女は気候も言葉も宗教も違う異国の地にはなじめず、悶々と暮らす日々でした。そんな妻に再会した夫は妻に幻滅し、妻はそんな夫の態度に夫の愛も信じられなくなり、ついに心を病んでしまいます。そして、望郷の念に駆られたのでしょうか、八雲を置いてギリシャに帰ってしまうのです。八雲4歳の時でした。

その後、八雲が6歳の時に父母の離婚が成立。父は母と別れるや、前述の昔の恋人と結婚します。八雲は、父方の大叔母で、アイルランドの富豪であるサラ・ブレナンに引き取られて暮らすことになります。この大叔母は結婚を機にカトリックに改宗した人。プロテスタントのハーン家とは折り合いが悪く、それまでもハーン母子には同情的で（カトリックと類似点のあるギリシャ正教の母親にシンパシーを感じていたよう）、八雲をととても可愛がっていました。

とはいえ、敬虔なカトリックゆえの厳格な教育観を堅持するサラ。その庇護のもとでの八雲の幼年期はさらなる孤独の日々となり、一方で、幻想と神秘の世界を広げるといふ、八雲の豊かな精神世界が築かれる素地になっていくのです。

八雲は、別れた母とはその後二度と会うことはなく、終生、母への思慕を胸に生きることになります。一方、母親を捨てて別の女性と歩んだ父を嫌悪し、生涯にわたって父を許すことができませんでした。父母の結婚の経緯や八雲以外の子を成したこと、また、その後の父母のことや八雲が日本時代

に手紙のやりとりをした親族のことなどは、ここでは割愛しましたが、後年、八雲はこの結婚を「すこぶる小説的」だったと言っています（またの機会に、割愛部分にも触れてみましょう）。

じつは父は、西インド諸島から帰還する船上で、再婚相手となる昔の恋人が別の男性と結婚した後、未亡人になっていることを知ったそうです。また、母との離婚裁判の際、父は「ギリシャでの結婚式はこの国では効力がない」と主張しています。これらの顛末を知った先入観と、父親の若い頃の写真からのルッキズムに基づいた私見でしょうが、父親の顔立ちは、音楽家のショパンの若い頃をうんと可愛くした顔を立派な頬髭（当時の流行だそう）が囲み、イケメンのチャラ男のようにも見えます。この父親は一時の激情で母親と結婚し、母親をいわゆる“現地妻”として処理したということでしょうか。無責任にもほどがある！

SIDE STORY

不器用ですが、家族は大事にします

八雲にとって、夫の責任とは、妻と家族の生活を守り抜くことでした。セツとの結婚では、当時まだ一般的ではなかった「日本国籍を持つ妻と子どもに確実に遺産を相続させる」ための帰化や遺言状の作成など、法的にも経済的にも家族の未来を生涯保障する責任を果たしています。

また、彼が車夫を選ぶ時は、「アナタ、オカミサン、カワリガリマスカ？」と聞いて、答えが「はい」であればそれだけでOK。即雇用したそうです。

そういえば、『ばけばけ』で登場したヘブン専属の車夫は、「不器用ですけどん」が口癖の実直な人でした（役名は永見剣造、演者は大西信満）。当時車夫は、没落士族がよくしていた仕事だったそうです。この永見車夫も武家の出ゆえに不器用だという設定だったのででしょうか。

そして、彼が家族を故郷に残していることを知ったヘブンは、彼を解雇し、退職金を渡して労い、家族と暮らすよう促しました。心温まるニクいシナリオでしたね。

なお、ドラマでヘブン・トキ夫婦にも増して存在感のあったリテラリー・アシスタント、錦織友一（演者は吉沢亮）のモデルは、ドラマ同様“大磐石”と呼ばれた西田千太郎という人でした。八雲が心から信頼を寄せた人物であり、彼なくして「小泉八雲」の誕生はなかったかもしれません。結核を患いながらの過酷な体調に悩まされた末に、両親と妻、4人の子どもを残し、34歳の若さでこの世を去ります。彼は家族に遺書を残しており、父親としての責任を胸にしたためたその内容は、読む者の涙を誘います。さぞ無念だったと思います。彼のことはまたの機会にしっかりお話ししましょう。